

巻 頭 言

嬰兒^{みどりこ}の微笑みを、野の花の香気を見よ。

星の光がとどかない空の下、不透明な水が寄せては返し、海であることを止めてしまったかのような渚を行くと、確かに歩いて来たはずの足跡は波にかき消され方向さえ失ってしまう。

人と大自然を結ぶ絆、人と人との絆、人類の過去と現在と未来を結ぶ絆が明るい闇の中にぼんやりと定かでない。

母の胎内の羊水が汚れ、母乳が人工栄養より危険と聞くと、哺乳類である人類の存続が危ぶまれる。私たちが心を尽くし、力を尽くし、築き上げて来たものの何たる悲惨。争いと飢えで、私のいのちの鼓動の一瞬一瞬にも、人の営為で多くのいのちが失われていく。

だからといって、顔を伏せ、身を閉ざすな。こんな時だからこそ眼を上げ、五感を澄まそう。悲しいことは悲しんで眼を覆わず泣こう。そして注意深く美しいものを探そう。

一つの時代の終わり。これは何も初めてのことでない。間違いを犯す。それは避けられないこと。この道に来て、それが違っていたら他の道を試みたらいい。時代の風をつらぬいて響き続けているものに、感性と理性を共振させよ。

まだ嬰兒^{みどりこ}は微笑み、野の花は香りを放っているのだから。

波打ち際、砂に埋もれた貝殻の深い真珠色。翼をひろげ気流に舞う海鳥のダンス。美しさが喜びに、喜びが善しという力へと流れはじめる。ただただ、そこにそのまま在るだけで。そして教えてくれる。新しい道はここに、私の中に在ることを。

もう一度自分のいのちの声を聴くこと。何かを作ったり、何かを得たりすることが大切なのだろうか？ 私が行きたいのはどこ？ 学校に行くことは本当に大切？ 聴きたかった言葉は？ 我慢したいの？ これは本当に食べたいもの？ 今、私が問わなくては、すべてが壊れ、外から問い直されるのかもしれない。自分の中の大きな問いにも、ほんの小さな問いにも、自分の答えを探し、自分の一歩を踏み出すこと。

この明るい闇を新しい夜明けの兆^{きざし}とみよう。

(グラバア俊子)